

マネはいかなる意味で「モダニズムの画家」であるのか —— マイケル・フリード『マネのモダニズム』における 「対面性」の概念をめぐって

大阪大学 折居 耕拓

本発表では、現代のアメリカを代表する美術史家であるマイケル・フリード (Michael Fried, 1939-) のフランス絵画史研究を対象として、彼によるエドゥアール・マネ (Édouard Manet, 1832-1883) の絵画の解釈を検討する。

《草上の昼食》(1863) および《オランピア》(1863-65) といった 1860 年代前半のマネの作品の革新性は、たとえばジョルジュ・バタイユ『マネ』(1955) においては、絵画の主題とその意味作用の破壊を理由として、またクレメント・グリーンバーグ「モダニズムの絵画」(1960) においては、画布の二次元平面の宣言を理由として、近代絵画を開始するものとして理解されてきた。

これらの従来解釈に対して、フリードは『マネのモダニズム——あるいは、1860 年代における絵画の表面』(1996) において、絵画と観者のあいだの関係という彼独自の視点を導入した。フリードは上述のマネの絵画について、あたかも観者へと直接に視線を投げかけているかのような画中人物を念頭に、絵画が全体として観者に対峙しているようだと、これを「対面性」(facingness) と呼ぶ。

この「対面性」の概念について、たとえばロバート・ピピン『美のあとに』(2014) では、フリードが「マネ以前の」絵画にそくして論じる「演劇性」とほぼ同義で理解されており、しかしこれが「マネ以後の」芸術の理解に対していかなる意味をもつのかについて明確にされていない。そこで本発表では、フリードの「対面性」の概念が、美術史における「モダニズム」の解釈に対していかなる寄与をなすのか、これを考察する。

本発表では、まず、フリードの論考「3 人のアメリカの画家たち」(1965) を検討する。当初マネの絵画は、現実の表象・再現という役割からの絵画の撤退を示すものとして記述された。次に、『マネのモダニズム』を検討する。マネにおける「対面性」は、18 世紀中葉以来のフランス絵画の進展の核心にあったとされるひとつの試み、つまり、観者の現前を否認するという試みの限界を示すものとして提示される。最後に、論考「対面性と精神性の出会い」(『フランス組曲』所収、2022) を検討する。「対面性」は、絵画の表面・表層を明示しながら、しかしそれに汲み尽くされることのないその内奥・深層を暗示するものである。

かくして本発表では、マネの絵画の「対面性」とはフリードにあって、芸術作品の内的構造をその外部へと吸収することへの抵抗、またそうした意味での、芸術作品の自律性の確立を示すものだという解釈を提示する。またこの抵抗が、戦後アメリカ美術へと連なる「モダニズム」の美学として示されていると主張する。これによって、18 世紀中葉から 20 世紀へと向かう広範な美術史の展開のうちにマネの近代性を捉え直すことが可能になる。